

僕が突然、 小説なんか書き始めたワケ

平居謙

0 校正作業って疲れるよね！

ここ数年間かかりつきりになっていた『平成詩史論』がようやく最終校正の段階に入ってきた。20 代後半のころ作品研究会でお世話になった「詩と思想」の版元である土曜美術社出版販売から 2025 年内には出る予定だ。今まで何冊か本は出しているが、これほど一冊の本に縛られる経験をしたのは初めてだった。その間、定例で主催している講座のための詩作品と、まるで戯作の川柳とを書くのがやっとなという感じだった。そんな状態なのに逆に長編小説『青野三四郎』を書き始めたのも、よほど校正作業が苦しかったと見える。これまで縁が薄かった小説を書くという行動に〈逃げた〉のはその反動で、何かまとまったものを書かなければ、精神が停留してしまいそうな気分だったからだ。詩人の高橋新吉が全集の校正作業を「辛くて死んだほうがマシだと思った」と書いていたが、それに似たものを体験したのかもしれない。

1 折口立仁の『平居謙論』(仮)

ところで、僕が『平成詩史論』を書いている間に、折口立仁は『平居謙論』(仮)をどんどん進めていた。その中で彼は、平居謙最初期詩篇から今に渡るまでを俯瞰し、読み進めている。幾編かの批評を既に読ませてもらったが、正直これにはちょっと焦ったのだ。自分が、平成詩という時代の謎を解剖・分析しているつもりで有頂天になっているときに、実は自分自身が解剖の実験台に寝そべることになっていたのだから！僕も何度かインタビューなどを通して、提供できる情報は伝え、資料なども適宜お渡しした。彼の分析力は鋭く、鮎川信夫とか宮沢賢治なんかを論じているのだとすれば、きっと僕はべた褒めするところだろう。「平居謙」がその対象であるから、今彼の論を褒めると、まるで自分を褒めているみたいで気持ち悪いからそれは止しておくが、作者である僕が全く気に留めていなかったことに焦点をあて、そこを掘り下げてゆく執念にはちょっと驚かされる。批評とはそういうものなのだが、その力は凄いもんだなとびつくりする。作者だって決して口を挟めない。ごく最近も、第 6 詩集『太陽のエレジー』(2012 年 草原詩社)を巡っていくつかの質問を受け、僕自身が曖昧にしていたような問題を改めて考えこむことになった。

2 「武装」というキーワード

折口の『平居謙論』(仮)の要の1つに「武装」がある。それは僕自身が詩集のあとがきその他で使っている言葉なのだが、彼はそれに焦点をあてて、僕の放言をいわば理論化しようとする。あ、理論化じゃないか。逆だ。彼の仮説を実証しようというのだ。僕が思いつきで言った武装ということについて、「確かにここに武装の跡がはっきりと見える」という具合に、あたかも探偵のように、僕の詩を徹底的に彼は読み解く。

3 僕自身の認識

第0詩集『時間の蜘蛛』(1985年 私家版)から第1詩集『行け行けタクティクス』(1990年 白地社)への「詩的武装」に関しては、自分自身でも非常に意識的であり、そのことはよく覚えている。「詩人としてやってゆくには、もっとキリつとした、他人を拒絶するくらいの独自性がなくっちゃならない！」というように自分を奮い立たせたって感じた。しかし奇妙なことに、第6詩集『太陽のエレジー』(2012年 草原詩社)における「僕自身の再武装化」に関しては、折口が指摘するように筆者自身のあとがきに明確に書いているにもかかわらず、それほど自覚的ではない。自分で「そんなこと書いてたっけ？」くらいに忘れてしまってさえた。詩集あとがきに確かに書いてることをこの目で確かめた現時点においても、どこか他人事のように聞こえてくるほどである。この差は何なのか。第6詩集『太陽のエレジー』における「再武装化」はマイナーチェンジ的な微修正レベルであったということか。さらには再武装化という以上、一度は武装が解かれていると考えるべきだが、それはどの時点なのか。自分で振り返って考えてみれば『アニマルハウス』(1996年 思潮社)において、僕の武装は頂点に達し、その後若干ソフト化する。ソフト化という表現が雑駁に過ぎるならば、難解性を捨て意識的に日常的な日本語により近接していったという感触がある。

4 詩のソフト化

前掲『平成詩史論』の中で僕は〈1990年代後半は、「現代詩手帖」が牽引してきた極めて難解な詩の最後の盛り上がりであった〉旨のことを書いた。まさに、自分自身の詩もすっぽりとその流れの中にあったわけだ。沈みゆく〈難解詩〉という船からぎりぎり抜け出した鼠の中の一匹に過ぎなかった。21世紀に入ると一挙に新しいタイプの、分かりやすい詩が主流となる。その中で、僕に関して言えば、唯一変転しなかったのは、性的奔放さ、変態性といった特徴だった。第3詩集『基督の店』(2001年 ミッドナイトプレス)を除けば、第6詩集『太陽のエレジー』まで維持されている特徴だと自分では考えている。

5 第6詩集『太陽のエレジー』再読

さて、折口が僕の詩を徹底分析するのに触発されて、自分でも改めて自分の詩について考えてみたいと思ったりする。とりあえず例の第6詩集『太陽のエレジー』に収めた諸篇をもとに考えてみるこ

とにした。まずは「パリの空の下で」。ただ、本稿はほんとに自分のための覚書なので、引用をほとんどしないから、できれば詩集を片手に読んで欲しい。でも、そんな奇特な人は、何本かの指で数えられるくらいしかいないだろうから要約（詩は要約できるのか？！）しておくこんな感じだ。パリの空の下で、詩人の萩原健次郎が朗読をしている。萩原は次の「6」で述べるように、実在の詩人である。中原中也の時代みたいに飛行船が飛んでたり、物寂しいサーカス小屋が見える。ムーランルージュやモンマルトルのSEX ショップも見える。新詩人のしげかねとおるも現れて、マルセイユの海で泳いでいる。ジャズが流れている。もうニッポンに帰ろうよ、といってもまだまだ僕は帰れない…

6 なぜ巴里に行ったか。

そもそも、なぜパリの空の下の話が出てくるのか。自分で自分の詩を解釈しても仕方ないから、覚書として、裏話を少しだけ書いておこう。今は鮮明に覚えているが、いずれ忘れてしまうこともあるだろうし、忘れる云々でなく、おっ死んじまったなら永遠の謎になってしまう。まあ、それは詩の本質と全然関わらないかもしれないから、どうだっていいと言えればいいのではあるが。2004 年の春だっただろうか。「詩歌句」だか何だかという雑誌のパーティが京都で行われるということで、僕はホテルグランヴィア京都に向かっていた。ところがホテルのフロントでパーティ会場を尋ねても、そんな会は本ホテルでは開催されていないという。何度聞いても知らぬという。結局僕の記憶違いで、別のホテルで行われているということが分かったのだった。現在ならば当日だってインターネット上で情報を容易に探すことができそうだが、当時はそういうわけにもゆかず途方に暮れていた。ふと萩原健次郎ならそのパーティに行くのではないかと思い、彼に電話を掛けた。受話器の向こうから「僕は行きません…」という声が聞こえた。パーティ開始時刻直前に固定電話で話している時点で答えは分かりそうなものだが、僕は大いに失望した。彼は会場も知らなかった。礼を述べ、電話を切ろうとすると、萩原が「平居君、パリ行かへんか？」と言う。唐突に僕は誘われた。聞いてみると、何でも「パリ朗読祭」というのに行くのだという。芸術の都 Paris にゆくのは今しかない！と思ったか思わなかったか。それに、せっかく誘ってくれているのだし！後で萩原に聞くと、ホテルを割り勘すれば安く上がるから、というのも大きな理由の一つらしかった。だが、それは後の話。僕は即決した。旅行までの間、萩原と支倉隆子と京都で色々打ち合わせたり、詩集『H(アッシュ)』を上梓したばかりで、当時パリに居た富岡郁子に案内を乞うための連絡を取ったりと忙しい日々を送った。その旅行には、ポエトリーディングで筆者が一番注目していたしげかねとおるも参加していた。当時彼は、寺西幹仁が代表をつとめていた「詩学」編集部にいたのではなかったかと思う。その夏、酷暑極まるパリで僕は遊んだのだ。

7 しげかねとおるの詩集新装版！

ちょうどこんな話を書いていたら、村田克彦のやしの実ブックスから「しげかねとおるの詩集の新装版を出したから読んでくれろ」と、懐かしい『爆発するゴロー』『Life is cuticle』の合冊本を送ってくれた。口に出してたら実現する、言霊信仰みたいだ。ちょっと怖い。まあ、そういうことのために、本稿は書かれているのだという気は大いにするのではあるが。

8 「メタリック・ワールド」について

もう1篇、自分でも印象の強い詩群がある。「メタリック・ワールド」である。この作品群は、萩原恭次郎『死刑宣告』研究と深い関わりがある。僕は、90年代の後半には、高橋新吉から萩原恭次郎に直接の研究対象を移しつつあった。1993年に『高橋新吉研究』を上梓したことによって、高橋新吉研究には一区切りつけようと考えていたのだった。しかし、萩原恭次郎『死刑宣告』研究に本格的に乗り出してみると、極めて当時の研究レベルの稚拙さに驚きを感じた。ここで詳細に語ることはしないが、何人かの優れた研究者を除いては、殆どが当該詩集の「詩文」にのみ目を遣り、挿画あるいは挿画との関係についての言及が皆無なのであった。一般の詩集とは異なり、挿画類を分析しなければ『死刑宣告』を理解することができないのは明白である。にもかかわらず、Visual ポエムとしてそれを扱う視線が多くの研究者に欠落していた。それなら、詩文をすっ飛ばして、詩集に含まれる挿画(版画)のみを感想することだって許されるはずだ。そう思い立って、当該詩集の挿画の一つ一つからインスパイアされた言葉を詩として作り上げていったのが、この「メタリック・ワールド」連作の原型であった。当初、林哲夫が編集発行していた同人雑誌「ARE」に発表した。『詩系宣告』に挿入された版画の1つ1つを小さくコピーし、その横に詩を付けていった。詩なのか、版画の解釈なのかよくわからい解説ようなものになった。その後詩集『太陽のエレジー』に掲載するために、少し解説臭さを取り去り詩としてブラッシュアップしたのではなかったかと思う。

9 再度「再武装化」のことなど

詩集『太陽のエレジー』刊行の時期(2012年)に僕が高橋新吉・萩原恭次郎を研究対象として改めて向かい合おうとした記憶はあまりない。この詩集を出した前後だったろうか。高橋新吉を研究しているという若い研究者がわざわざ尋ねてきてくれたことがあった。しかし僕は、一緒に酒を飲むでもなく、ただ喫茶店で暫く話を聞き、それで別れた。自分と同じ詩人を愛する若い研究者と出会うという、高橋新吉に関する限り、ほぼ今後もなさそうな機会であったにも関わらず、僕はあまりリギになれなかった。その若手が「これからイギリスで学会発表するのです」などと息巻いているのが確かにあまりにぎらぎらして近づきたくなかったというのもあったが、それにしてももう少し歓待してもよかったのではないか。そう後になっては思った。が、なぜリギではなかったのかという事の方が問題だった。そして「ああ、高橋新吉研究は、完全に僕の中で終わってるのだ」ということを確信するに至った。こんな具合だから、詩集『太陽のエレジー』刊行前後で、ダダイストたちに強い関心を持ち始めていた、ということはそれほど意識はしていない。また、創作においても再度彼らダダイストたちの詩的方法に回帰しようというような思いは全く起こらなかった。しかし確かに彼らアヴァンギャルド詩人に関わる詩をそのころになって今更ながらに書いたり、再度推敲したりしたということは事実と

してあったわけだ。それは「再武装化」とどの程度関連しているのだろうか。当時は文学研究から観光研究に大きくシフトしようかどうか迷っていた時期であった。観光は悪く言えば俗の極み、よく言えばあらゆる現実的な要素を総合的に含みこんでいる現象であって、1つの地域にも、怖ろしく深いストーリーが潜んでいることを観光プランの実地検証に度々同行することで実感し始めていた頃であった。また大学時代の恩師佐藤義雄先生の著書『都市の風景 文学の風景』に触れて、文学と場所との緊張関係を強く意識した時期でもある。「再武装化」を現在の目からもう少し丁寧に説くなら「自らの詩と知の総結集の必要性」とでもいうべきだったのかもしれないと考えている。第5詩集『灼熱サイケデリ子』(2005年 草原詩社)まではまさに純粋培養の詩を詩集に収めていたのが、村上春樹研究、one-piece・Dragon Ball 研究、観光研究といういわば詩とはスケールの違う「流行現象」を片手間ながら研究対象とすることで、それら流行物のとてつもない広がりを実感していた。一方でそのようなレベルに詩を持ち上げようと企図しながらも方法を誤ることで自爆していった和合亮一の惨劇を目の前にすることで、僕は改めて詩に向かい合う覚悟を固めたのではなかったかそんな風に思う。

10 浦安という場所について

本稿「1」で書いたように、折口が最近『平居謙論』の草稿の一部を見せてくれた。そこには「浦安で暮らした」という詩に「一九八七年三月二六日」という日付が現れることに関して、次のようなことが書かれていた。未発表なので、折口に許可を得た上でここに掲載する。

この部分には「一九八七年三月二六日」という日付が何の説明もなく置かれているが、これは先に触れた「左手で握手なんかしなければよかった」という高橋新吉との別れを描いた作品に出てくる「一九八七年三月」と同じ事件を表していると解釈できる。つまり、高橋新吉と最後に会った日付なのだろう。

作者である僕でも覚えていなかったような日付の一致をよく見付けたなということに驚きを感じた。また、彼の中で様々な可能性の網を張り巡らせてよくぞ、1つの結論を導いたな、という感動があった。自分について書かれたものを読んで感動というのも変な話だが、ただただ感動した。だからこそ、僕の覚書を書いておかなければならないとも一方では思った。もちろん批評家の論展開に文句をいう権利など作者は有していないのだが、作者の思い、というのを機会があれば述べておくのも、批評の未来、延いては詩の可能性を拓くことにつながるかも知れはしないか。

11 「一九八七年三月二六日」という日付。

折口が上記のように解釈するのも当然である。高橋新吉を病院に見舞ったのもその時期であったかもしれない。しかし、筆者にとっての「一九八七年三月」というのは、浦安の町を彷徨った日のたくさんある記憶のうちの1つに過ぎない。それまでに何度も何度も地下鉄東西線浦安駅近辺を彷徨い、昼歩き、夜に紛れ…を繰り返していたために、全ての店やビルが極めて親しいものとなって

いた。ある日ふと、親しい友人のデッサンをするような気分で僕はその町のあり様を書いたのだ。持っていた大学ノートに、何故か赤い水性ペンで以て、歩きながら書き付けたのだ。そのため、B5判のそのノートにはひどく大きな文字が躍っている。折口にこの日付のことを指摘されたとき最初、その頃親しくしていた女性と別れたその日だったのではなかったかと思った。しかしそうではなかった。本当に別れ話が白熱していたある朝、喫茶店で一緒にモーニングセットを取りながら、ふと店のマガジンラックに目をやった時、朝刊スポーツ紙にショッキングな文字が飛び込んできたのを鮮明に記憶しているからだ。そこには「プロディ殺人」という見出しがあった。私は彼女と話すことも忘れて「わっ」と言って立ち上がり、スポーツ新聞のラックに駆け寄った。彼女は唾然としていたかもしれない。しかし少なくともその日までは、彼女と一緒に住んでいたわけである。有名プロレスラー‘超獣’ブルーザー・プロディが殺されたのは、1988年7月のことであった。だから「一九八七年三月」は、彼女とモメていたとしても完全に離れてしまった日ではない。高橋新吉を見舞ったついでに浦安を再訪したわけではなく、1985年から1988年あたりまで、僕は浦安あたりを放浪していた。その女性にはお嬢さんがいたため、マンションに泊まるわけにもゆかず、そのお嬢さんが学校に行く朝の時間までは、夜中、浦安の町をホームレスとして彷徨するのである。そして、お嬢さんが学校にゆくと、一晩中街を歩き回ってへとへとなものも忘れて、彼女と時間を過ごすのであった。彼女は三十台の後半だったが、淋しい美しさと可憐さを残す素敵な女性だった。しかし僕の両親は、年の離れた女性との交際を激しく反対していた。そのため、実家からも離れ、しかし関西学院大学大学院に通う立場であったために、関西を捨てることができず、週の半分は関西、半分は浦安で暮らすという生活が二年近く続いた。「半同棲」という言葉があるが、僕の場合もう「昼だけの同棲」という面があった。夜は浦安を彷徨するのである。はっきりとした記憶はないが、高橋新吉を見舞ったのは、浦安の彼女の家から行ったのではなかったかと思う。こんなことはもちろん僕の詩の読者(がいとすればだが)にとっては、別にどうでもよいことであり、しかも、詩の解釈にも大して影響のないことかもしれないが、僕自身としては、その日付けに関しては、書いておく必要がある気がしたためここに記した。「一九八七年三月二六日」は、作品の書かれた日付に過ぎず、ある特定の事件の日付ではなかったのだ。あるいは「浦安で暮らした」という作品を書き終わったという〈事件〉の記録の日付であった。こう書きながら、「左手で握手なんかしなければよかった」の中の「一九八七年三月のさよなら」は、それでは何だったのだ?と改めて疑問に思った。そして、それに関しては詩を読み直し、折口の判断が正しいのだと結論付けた。高橋新吉を最後に見舞ったのは、その年の三月だったのだ。

12 旅の期間やモデルのことなど

本詩集Ⅳ章「北長門バージンブルース」とⅤ章「駱駝山純情詩篇」に収めている、様々な場所を巡る作品の多くは、先にも書いたように、観光プランのモニターとして本学国際観光学部初代学部長であった佐藤喜子光に同行し、あるいはその指示のもとに訪れた場所であった。そこで制作した作品を並べたものである。官能的な要素を添えるために、「その地で世話になったさまざまな少女た

ち」を登場させるようなことが屢々である。稀には実在の人物もないわけではないが、その土地の地霊にインスパイアされた想像上の人物である。故・山田兼士はこの詩集を「悪趣味な誠実」と評したが、ありもしない情交をこれ見よがしに書いていると彼は思ったのかもしれない。あるいは「誠実な悪趣味」だったか、忘れてしまった。ともかく、そんな人物はいない、という場合がほとんどである。また勤務先の大学の、長期休暇は確かに夏・春ともに2か月近くあるが、現実には全ての期間に渡って取材地に滞在することは不可能であって、実際にはそれぞれの地域に、長くても一週間程度ではなかったかと記憶している。しかしこれとて作品のことであり、作者の実際の体験とは別の話である。

13 不在の駱駝

もう1点、これは大きく悔やまれることであるが、「駱駝山純情詩篇」という章に、表題作に相当する「らくだ山」という作品が欠落していることである。これは『ウルトラセクション 阿蘇』という観光ガイドブックを事実上単著で作成した時(事実上というのは、前述の学部長の指示で、彼と彼の関係者の名前を強引にそこにねじ込まれたのであって、彼らが1行でも本書を書いた痕跡はないのである)、詩人の自恃を表明するために、ガイドブック中に何篇かの短い詩を挿入した。その中で、「らくだ山」というのが一番のお気に入りであったために、表題に使ったはずが、肝心のその作品が載っていない。これは出版後、随分あとになって気づき、飛び上がるほど驚いたことであった。しかしこれも、読者にとっては重要なことではないだろう。僕自身のために書いておく次第だ。もっとも、この〈寓話?〉が示すように、最も大切であると考えているものがふと気づけばそこにはないというようなことは、人生には、あるいは人生などと大上段に振りかぶらなくても日常の中にも、極めてありふれたかたちで存在している。この「らくだ山」のように。

14 震災と関わらせて読まれる運命の時期

「楽園の復元」という詩の中の「海賊船が海面を離れ／空に向かって飛び立つ、のではなく／水底に向けて深く深く沈み込んでゆく」という詩句に関して折口が、津波に翻弄され、空に舞い上がるほど或いは海底に潜るほど揺れる船、すなわち東日本大震災の喩として、先述の草稿において解釈している。これは漫画『one-piece』の読者には有名なエピソードなのだが、ルフィの船団は、実際に天上の国を訪れたり、海底に存在する島を舞台にしたりする。折口はそれを知らなかったため、文字通り海賊船が空に舞い上がるように、あるいは海底に潜るように大波に翻弄される様子として読んだのだらうと想像する。しかし、『one-piece』を知らない人が読めば、たしかに僕は、震災と関わって読まれるように書いている。その意味で折口の読み方がもっとも正統なそれであると、後になって気づいたのだった。ただ、僕にとって、復元の必要があったのは、福島という現実の場所ではなく、福島を擁護するような形を取って広くその名を広げていった和合亮一により腐らされた詩の楽園を復元することであり、僕は、この詩集によって、その復元を目指したのだっただろうと思う。そのためには、前述のごとく、ありとあらゆる力を結集させて詩に向かいある必要があった。また最初の「再武装」の話に戻ってしまうが、それが詩の再武装化であったと現在では考えている。

『平成詩史論』と折口『平居謙論』の間で、僕の記憶はぐるぐると回っている。うまくいけば折口が、僕の放言をまた適切に整理してくれるかもしれない。しかし、折口に頼っていてもいけないだろう。何事も自分でやらなきゃ、始まんないからだ。それではじめに書いた、小説『青野三四郎』の中で今度は、自分の過去を自分自身で整理してみようと考えた。いや、はっきり確信して書き始めたわけではなかったが、少し書いてゆく上で、すぐにそのことが分かったのだ。これが僕が突然、小説なんか書き始めた理由の一つではないかと、思っている。しかし、それよりも何よりも大きいのは、変な言い方になるが「小説こそ、僕が求めていた詩だ」ということにおそまきながら気づいたからだ。僕は、詩において、自分の感情をそのまま出さないという書法を確立するために、モダニズム的手法を取ってきた。それは、私詩的なものが多い詩の世界と極端に対立することでもあった。しかし、小説の世界は、私小説を除けば、初めから作者は登場人物と切れている。作者の思いの反映はあっても、最初から恐ろしいほどの明快さで、作者＝主人公は訣別している。ああ、早くから気づけば、詩など書く必要もなかったのに。そんなことまで思うほどにまで、小説の手法そのものに、気楽さを感じている。繰り返すが、僕は小説が、詩以上に簡単に詩を実現し得る方法だと今ごろになって発見したのであった。その時、これまで書いてきた詩がそのような形に変形するか、あるいは変形せずに従来の型を保つか。これがここ暫くの僕自身のテーマである。(了)